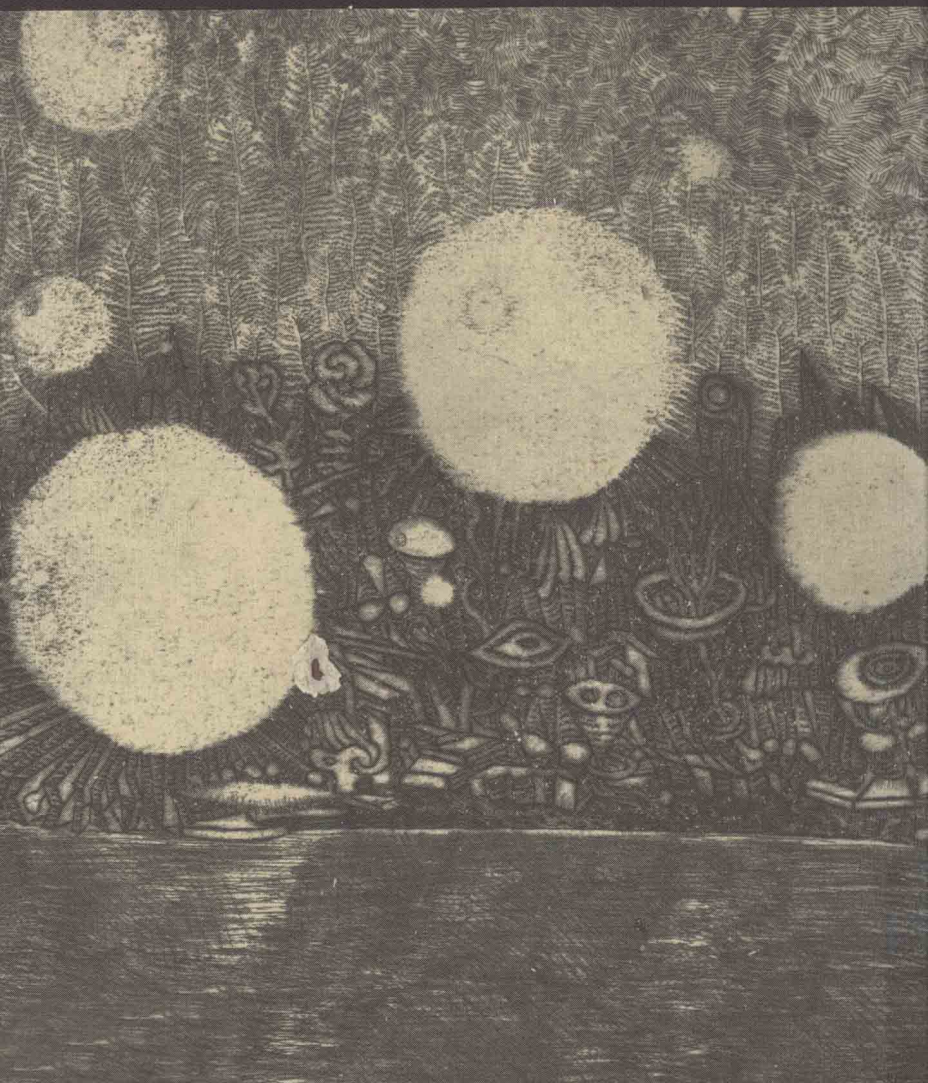
大江健三郎

われらの狂気を生き延びる道を教えよ



われらの狂気を生き延びる道を教えよ

大江健三郎

Ⓢ 新潮社

われらの狂気を
生き延びる道を教えよ

一九六九年四月二〇日　発行
一九七一年六月三〇日　一二刷
著者大江健三郎
発行者佐藤亮一
発行所株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話東京(03)二六〇局一一一一
振替東京八〇八
二光印刷、神田加藤製本
定価五五〇円

© 1969 Kenzaburo Ōe
乱丁、落丁本はお取替えします

Printed in Japan

われらの狂気を生き延びる道を教えよ・目次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一部　なぜ詩でなく小説を書くか、という
プロローグと四つの詩のごときもの　（7）
第二部　ぼく自身の詩のごときものを核（コア）とする
三つの短篇　（19）
走れ、走りつづけよ　……21
核時代の森の隠遁者　……75
生け贄男は必要か　……115
第三部　オーデンとブレイクの詩を核（コア）とする
二つの中篇　（159）
狩猟で暮したわれらの先祖　……161
父よ、あなたはどこへ行くのか？　……245
a　裏　245
b　表　300

装幀

駒井哲郎

われらの狂気を生き延びる道を教えよ

第一部

なぜ詩でなく小説を書くか、というプロローグと四つの詩のごときもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

なぜ詩でなく小説を書くか、という
プロローグと四つの詩のごときもの

ぼくは詩をあきらめた人間である。それは、あきらめるという言葉がもともと二重の意味あいをそなえて一個の言葉として実在している事情そのままに、詩の言葉と小説の言葉の根本的なことなりについて、なんとかあきらかに認識したことによって、詩を書くことをやめ、小説にむかった人間だ、ということである。したがって、ぼくの小説の言葉が、いわゆる現代詩の世界につきあわせると稀薄だ、というような嘲笑を、その現代詩の世界に生きている学者詩人（学者犬という言葉もある！）からこうむっても、それは言葉の根本的な性格についての批判者自身のあいまいな理解にもとづく非難であるとしか答えることはできなかった。

しかし、ぼくは様ざまな詩人たちの詩に関心をいだきつづけないわけにはゆかない。それはぼくが小説を書いている時間は、日常生活のごく一部分にすぎないのであって、一般に言葉に無関心でない人間が、かれの肉体＝魂を、ひとつの、あるいはいくつかの詩の錘（おもり）にさしつらぬかれないで生きることはできないからである。やはり、いわゆる現代詩の世界に生きている翻訳家詩人（馬自身の言葉を話すほかに、それよりほかの言葉を話す馬というものもあるそうだ！）から、

ぼくの小説など手にとってみる気もおこらないという罵倒をこうむったこともあるが、逆にぼくは真に詩の言葉をそなえた詩人にたいしては絶対に無関心ではいられないのである。

様ざまな時代の、様ざまな地方の戦闘で、むごたらしくも殪れた兵士の背嚢からしばしば詩集が発見されるという報告はなにを意味するだろうか？　それは人間が、明瞭な意識をそなえたまま、目前に自分の肉体＝魂の死を見つめるとき、自分がひとつの、あるいはいくつかの詩を内部にひそめたまま殪れるにちがいないと、はっきりみきわめざるをえないからであろう。自分の肉体＝魂の死が、現にいまうごいている心臓や脳中軸の破壊とともにおとずれるように、それはまた、現に自分の内部にある、ひとつの臓器のような詩の破壊とともにやってくると感じられるからであろう。詩とはそのようにも人間の肉体＝魂の内部にはいりこんで機能しつづけ、その実在感は、腫れた肝臓よりももっとあきらかに指でたしかめることができる。しかし小説とは、読みおわれば塹壕に置きざりにされるものだ。読みおわった小説を塹壕に棄てたまま、起ちあがって、いった兵士たちが弾丸をうけて殪れるとき、かれはその肉体＝魂からひき剝がしがたい詩とともに死んだのである。ぼくは兵士ではないが、この不慮の死の陥穽にみちみちた時代を生きるにあたって、そうした突然の死のまぎわに、自分の肉体＝魂の内部に、ぼくとともに死ぬところの詩を確保することで、いくらかなりと死の恐怖と苦痛をやわらげるべく詩をもとめているのであるし、そのような詩よりほかの、いかなる華やかな言葉の飾りもさがしだそうとしているのではないのだ。

さて、ぼくが詩をあきらめたのは、自分の言葉にたいする、自分自身の方向づけが、詩の言葉より、小説の言葉にむいていることを認めざるをえなかったからである。そして、さきにのべた

詩の言葉と、小説の言葉の根本的なことなりについてのぼくの認識は次のように要約することができる。

詩の言葉の実質と機能は、小説の言葉のそなえているところのものと、まことに根本的にことなっている。いま、小説の言葉の実質と機能、というふうにいわないのも、そもそも、これらふたつのことなった言葉の大陸の、根本的なことなりを見すごすおそれのあることは、ひとつなりとしたくないからだ。というのは、詩の言葉の実質の重さにくらべて、小説の言葉の実質はじつに軽く、それはほとんど実質といえないほどのものであるからである。小説の言葉においては、機能こそがその主体である。小説の言葉の実質とみえるものは、この機能を包みこんでいる殻のごとき存在にすぎない。機能が十全に発揮されたあと、当然にそれは脱け殻のごときものとなる。そして、言葉の嵩ばりかたの制限値は美学的にきまっているのであるから、機能をより充実させるために、言葉の殻はできるかぎり薄くなければならない。しかし充満した機能が外被をつきやぶってしまわないように強靱な殻でなければならないことも当然である。したがって小説の言葉の殻は、ロケットの構造にもちいられる特殊な合金のようにも、薄く軽く強靱であって、そのうちがわに豊富な機能をしこんでいるという性格のものであることが望ましい。

ところが詩の言葉においては、機能が問題たることはもとよりであるにしても、実質もまたおおいに問題なのだ。金属の比喩をもういちど用いるなら、詩の言葉の質量は可能なかぎり大きくなければならない。その上、詩の言葉においては、機能とそれを包みこむ殻とをわけることができない。詩においては、放射性物質を包む鉛の厚い殻のように、重くぶあつい殻が鋭い放射能をもった微粒子をぎっちりと包みこんでいるのであって、読み手にはそもそも、詩そのものを破壊

することなしには殻をとりのぞくことは不可能だ。

したがって小説においては薄い殻をとりのぞいて言葉の機能を働かせたあと、すなわち一冊の小説を読みおえたあと、閉じられた本は、落花生の殻の堆積のごときものである。ところが詩は、真にそれを読んだ者にとっては言葉の実質と機能がそのままひとかたまりの錘となって、肉体＝魂のうちにしっかりくいこんでしまうのである。そこで、詩には、読みおえるということがない。いったん人間が詩に遭遇すると、その出会いはつねに進行中である。

そこで問題を特殊化して、とくに小説を書く人間にとって詩と出会うことが、かれの小説にどのようなインパクトをあたえるかを考えてみよう。なぜなら、ここにおさめた短篇と中篇とは、ぼくにとってそのようなインパクトの産物にほかならないからである。

もっとも端的にいうならば、ぼくにとって詩は、小説を書く人間である自分の肉体＝魂につきささっているトゲのように感じられる。それは燃えるトゲである。日常生活において自分の肉体＝魂が、その深みにしっかり沈んでいる詩の錘をたよりに生きているとすれば、小説を書こうとしているぼくの肉体＝魂は、自分の小説の言葉によって、なんとかこの燃えるトゲにたちむかおうとしているわけである。この内なるトゲを、外部のものとすべく小説の言葉にとらえなおしたいと考えるのが小説制作の操作である。もっともそれが、小説の言葉と詩の言葉の癒着を意味しないことは、さきにあげた、あまったれであわてものの学者詩人でもなければ、誰も誤解しはしないだろう。

旧体（アンシャン・レジーム）制の散文国より、詩の共和国めざして

通り過ぎる者。
国境は、時のネジレの現場にて
かの人はエイゴーフヘン通り過ぎる者。

また、より詳細にいえば、ぼくの内部における燃えるトゲには二種類があると分類しなければならない。その第一は、ブレイクや、とくに深瀬基寛博士のみちびきによるオーデンの詩である。それらは、ぼくの肉体＝魂が死ぬときにあたってもっとも心強い支えとなる筈のものである。そしてそれが生きつづけているぼくの、小説を書く人間としての内部においては、つねに燃えつづけているトゲである。

第二は、ぼく自身の内から芽ばえたものであるが、すでにぼくの告白したとおりに、ぼくにおける詩の言葉の能力の不在によって、ついに詩とはならなかったもの、しかし、いわば濡れたコークスのようにくすぶりつづけることはやめないトゲであるところの、詩のごときものである。ぼくはそれらをあらためて小説の言葉によってとらえなおすことをめざして様ざまな努力をした。

そしていま、ここにおさめて刊行しようとするのが、ブレイクとオーデンの詩を右にのべた燃えるトゲのような意味での核（コア）とする二つの中篇小説であり、ぼく自身の詩のごときものを核（コア）とする三つの短篇小説である。

これらがすべて《狂気》を主題としていることについては、ぼく自身にとってはまことに具体的に明瞭な理由がある。肉体＝魂の死にあたって、内在化された詩がその人間の唯一の支えであるとすれば、魂の死である狂気にたちむかうための支えもまた、その狂気の接近を恐怖と苦痛と

ともに見すえている者にとって、かれの内部の錘、あるいは燃えるトゲたる、詩にほかならないはずではあるまいか？　ぼくは、これらの小説群が、ぼく自身の具体的かつ明瞭な、右の事情にかかわる理由を、おなじく具体的かつ明瞭に、読者にむかって伝達することを期待するほかに、あらためて書きしるすことはない。なぜなら小説の言葉の機能とはまさにそのような方向づけにおいてのみ力を発揮するものであるからである。

この自家広告の終りに付記するのが、ぼくのいわゆる詩のごときものであるが、それが読者に歓迎されると考えているのでなく、また、それらを詩だと思っているのでもないことは、あらためていうまでもないであろう。

それはぼく自身が、

桃色フリル沢山なれども
実体（サブスタンス）は布ひとつまみ
それは下着、詩ではない

とみなすものである数篇にすぎない。かつてぼくの書いたもので友人に楽しみをあたえた詩のごときものはレストランのメニュに料理を賞讃する次の一節を書いたときのみであった。

氷でひやしたうでアスパラガス
自然なれどもファンタスティク

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c